

車のいろは空のいろ

あまんきみこ作

北田卓史絵

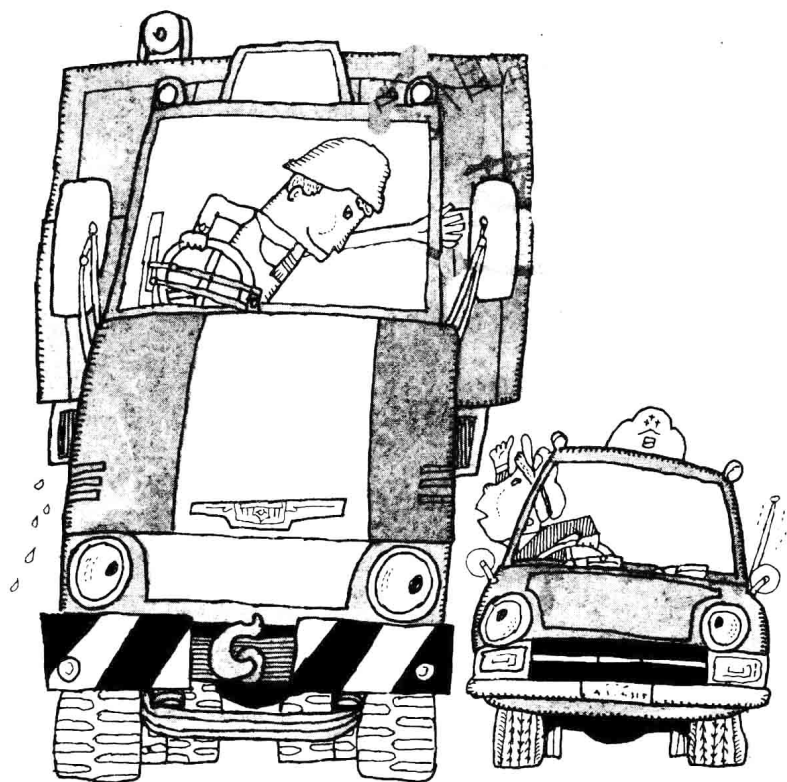


童話

車のいろは空のいろ

あまん きみこ・作

北田卓史・絵



ポプラ社の創作童話 3
車のいろは空のいろ

あまんきみこ著

ポプラ社 昭和46年 120p 22cm

N. D. C. 913

車のいろは空のいろ 定価 450円

1971年7月30日発行©

著 者 あまん きみこ

発行者 久保田 忠夫

発行所 株式会社 ポ プ ラ 社

東京都新宿区須賀町5

振替東京149271

印刷所 新興印刷製本株式会社

製本所 石毛製本株式会社

(落丁・乱丁本はいつでもおとりかえます)

・まえがき・

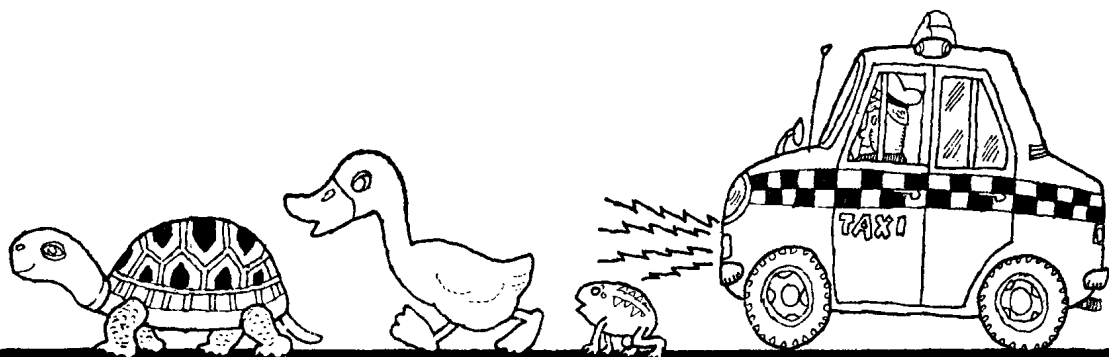
(おやっ?! あの人、きつねじゃないかしら、
くまじゃないかしら…… それとも……)
そんなことを かんがえたことは、
ありませんか? でも、それは……

ないしょ、ないしょ



もくじ

小さなお客さん	6
うんのいい話	20
白いぼうし	33
すずかけ通り三丁目	42
山ねこ、おことわり	57

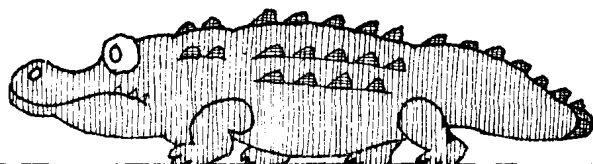
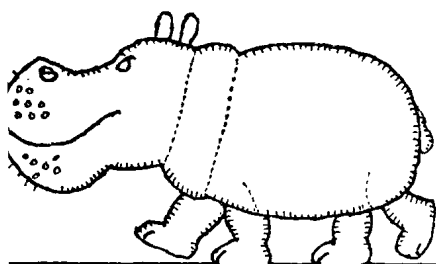


シャボンの森……………69

くましんし……………82

ほん日は雪天なり……………101

あとかき……………119



筆者の紹介

あまん きみこ

一九三一年満州に生まれ、大阪府立桜塚高校を経て、日本女子大学（通信）卒業。新日本童話教室第一期生。

「日本児童文学」「びわの実学校」など誌上に短編を発表しているが、車のいろは空のいろが処女作である。期待しよう。

北田卓史（きただ たくし）

一九二一年東京に生まれ、東京工業専修学校機械課卒業。その後、絵本、児童出版物等の挿画執筆。児童出版美術家連盟、童画集団に属し、現在に至る。その間、日本童画会賞、小学館絵画賞等受賞。

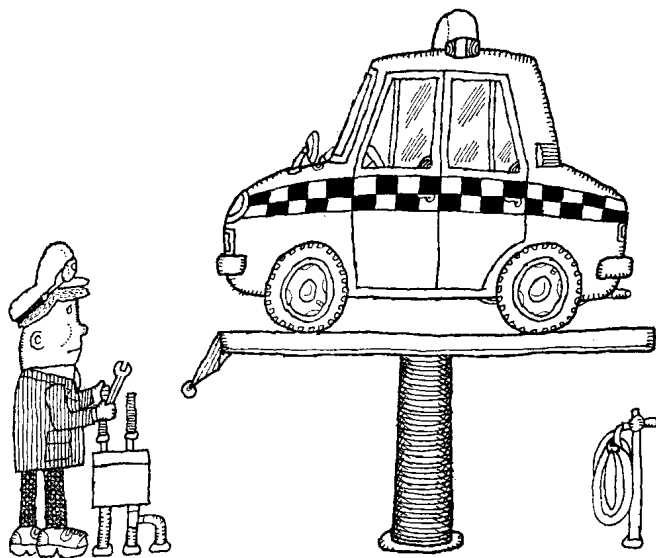


ポプラ社の創作童話

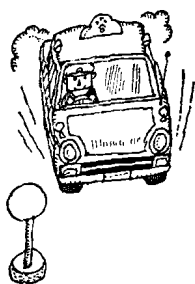
車のいろは空のいろ

あまんきみこ 作

北 田 卓 史 絵



小さなお客さん



空^{そら}いろのぴかぴかのタクシーが、一台^{だい}、とまっていた。

そのうしろにしゃがみこんで、さっきから、ねっしんにタイヤをしらべているのが、この車^{くるま}のうんてんしゅ——、松井^{まつい}五郎^{ごろう}さんなのです。まるいはなの上^{うへ}に、つぶつぶあせがひかっています。

とおくのひこうじようまでお客^{きやく}をのせていき、からでもどるとちゅうなでした。

ちっ——

と松井^{まつい}さんは、らんぼうなしたうちをしながら立^たちあがりました。おもったとおり、うしろのタイヤがパンクしていたからです。

むしまんじゅうのようにふくれた顔^{かお}で、松井^{まつい}さんは、荷台^{こだい}から、銀^{ぎん}いろのジャッキをとりだしてきました。

ふとい車^{しや}じく^くにジャッキをかけ、この車^{くるま}をもちあげねばなりません。

「ん！」

と、ジャッキについているねじぼうをまわそうとしました。ところが、うごきません。

いつもなら、このくらい力^{ちから}をいれるとうごくはずなのに、なかなかうごきません。松井^{まつい}さんの顔^{かお}は、だんだんだんだん赤^{あか}みをまして、カニのようになってきました。

「おにちゃんのいうとおりだよ。やっぱり足^{あし}がこわれたんだね。」
すぐうしろで、かわいい子^こどもの声^{こゑ}がしました。

「まるくたって、足^{あし}さあ。わかったろ。」

「でも、この足^{あし}、毛^けがはえてないね。」

「すりきれたんだよ。そんなことが、まだ、わかんないんかなあ、

おまえは。」

ふんばって力をこめていた松井さんは、ふっとふきだしてしまいました。

わらいながらふりむくと、六つと四つぐらいの小さな男の子が、つくづくとタイヤをながめています。おそろいのみじかい赤ズボンをはき、白いシャツをきた、元気そうな子どもたちです。

「おじちゃん、それうごかすのでつだってあげようか。」

大きな目をくりくりさせて、こういったのは、にいさんのほうです。

「ああ。」

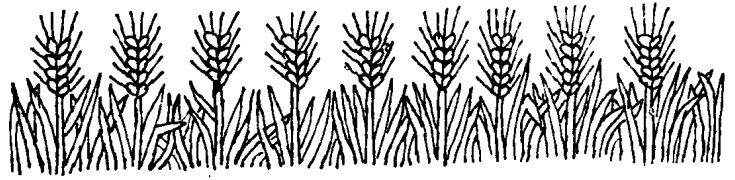
つりこまれて松井さんは、おもしろそうにうなずきました。

「ぼうやたちがつだってくれたら、さぞ、たすかることだろうよ。」

「ほんとう？ さわらせてくれるの？」

「ぼく、して、いいの？」



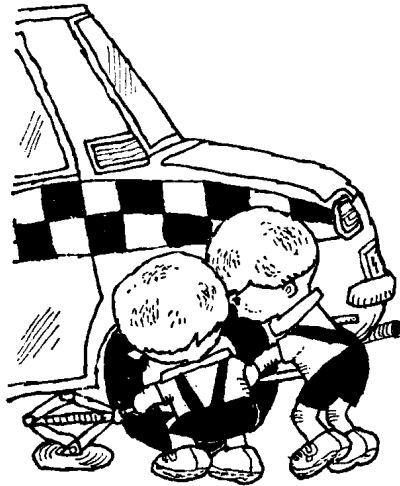


いっしょにいつて、

ふたりは、はねるようにジャッキのそばにかけよりました。

「気をつけなよ。」

松井さんは、ほんのいきぬきのつもりでこうたいして、たばこに火をつけました。けむりをはきながら、はじめてあたりを見まわし



ました。

道路のかたほうは、うすみどり色のむぎばたけが、ひろびろとおくまでつづいています。はんたいはすこしもりあがって高くなり、タンポポがきいろのじゅうたんのようです。そのむこうには、かぶとをふせたような青いおかが五つかさなっていました。

(すっかり、春になったなあ。)

と、松井さんがおもったときです。

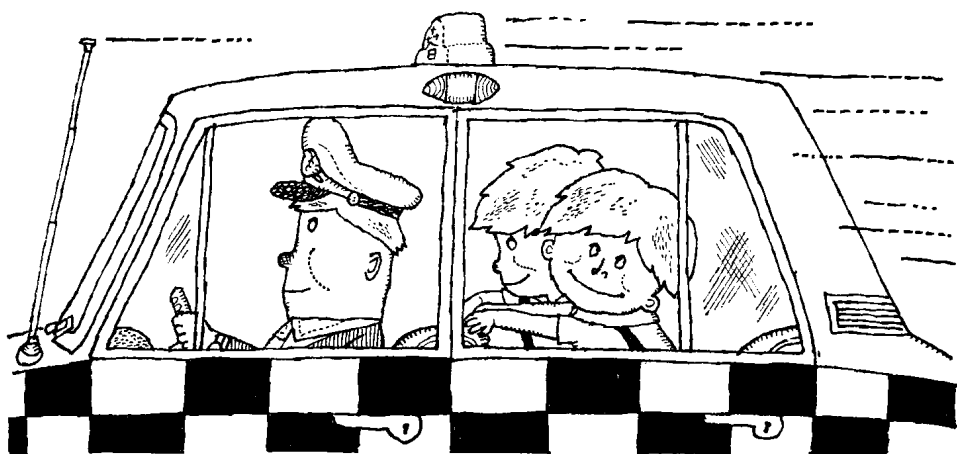
「一、二、三！ ほら。」

「一、二、三！ ほら。」

ふたりが、そろって大きなかけ声をかけはじめました。ふりむくと、どうでしょう。

車がすこしずつ、もちあがりだしているのです。

あつけにとられた松井さんは、ぽかっと口をあけたままになりました。



スペアタイヤにとりかえてから、松井さんは、ほっとしていいました。

「おれいに、ぼうやたち、そのへんま
でのせてあげようか。」

「これに、のせてくれるの？」

大きな四つの目がきらきらひかり、糸のようにほそくなって、わらいで
いっぱいになりました。

「こんなやつにのるのは、はじめてだ
よ。」

「ぼくたち、生まれてはじめてなんだ
よ。」

空^{そら}いろの車^{くるま}は、いきおいよく走^はりだしました。

あいたまどから、風^{かぜ}がふきぬけていきます。

「すごいなあ、すごいなあ。」

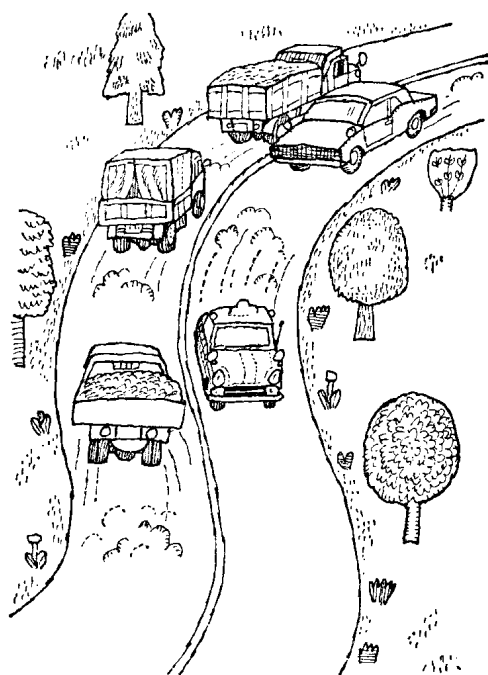
と、にいきさんが三十二回^{かい}めのためいきをついていいました。

「はやいなあ、はやいなあ。」

と、おとうとが三十三回^{かい}めのためいきをついてから、さけびました。

ふたりは、やたらにわ
らったり、さわいだりし
ました。じっとなんか、
とてもしていられないみ
たいです。

松井^{まつい}さんは、じぶんま
で、はじめて車^{くるま}にのった



日^ひのように、心^{こころ}がほかほかしてきました。

いなかから、この町^{まち}に、はじめてでてきたのは、やっぱり、こんなによく晴^はれた四月^がでした。ぴかぴかひかった大^おきな車^{くるま}にのったとき、やっぱりこんなに声^{こゑ}をだしてわらいそうで、がまんするのにこまりました。おりて、料^{りょう}金^{きん}を、どうまき、からだしてはらうとき、

「ありがとうございます。」

